

No. 112

December 1995

甲虫ニュース COLEOPTERISTS' NEWS

日本未記録のカッコウムシの1種*

佐藤 真 矢

日本からはこれまで3種の *Tenerus* 属 (ツマガロツツカッコウ, キムネツツカッコウ, ルリツツカッコウ) が記録されているが, 筆者は本属で, 本邦初記録と思われる石垣島産の標本を検査する機会を得たのでここに報告する。

問題の *Tenerus* 属の1種は沖縄県石垣島の平久保で採集されたもので, 体長は約7mm, 頭部と上翅が黒色, 胸部と腹部は橙色, 前胸背板の前縁に黒色部があり, 本邦産の他の種とは一見して色彩が異なる。触角は黒色。腿節は橙色で先端部のみ黒色, 脛節と跗節は黒色。体の毛は毛のはえている部分の体色とほぼ同色。上翅には中央まで達する一対の縦隆条がある。以上のような特徴から *Tenerus formosanus* SCHENKLING と同定される。

次に, SCHENKLING は原記載の中で *formosanus* の近似種として *T. flavicollis* GORHAM と *T. cyanopterus* SPIN. を挙げているが, *flavicollis* は腹部と脚は青色, 上翅は暗青灰色であること, *cyanopterus* は体が灰色の軟微毛で被われ, 前胸背板の後縁に小さな黒色紋が一つあることで区別できる。また CAPIN (1924) は *cyanopterus* と *T. luzonicus* CAPIN との類似について述べているが, *luzonicus* は前胸背板が全て橙色で, 黒色部がないことで *formosanus* と区別できる。

そこで, *formosanus* の和名であるが, 三輪 (1931) が使用したホタルカッコウが唯一のものである。ホタル類の代表的な体色に見立てて, 適切であると思われるが本邦産 *Tenerus* 属の和名には3種ともツツカッコウムシとあるので, ホタルツツカッコウムシが最も適切と思われる。

Tenerus formosanus SCHENKLING, 1912

ホタルツツカッコウムシ (和名新称), 図1, 2.

SCHENKLING, 1912, *Ent. Mitt.*, I(11): 329; 三輪, 1931, 台湾總督府中央研究所農業部報告, 55: 155; CORPORAAL, 1950, *Coleopt. Cat. Suppl.*, pars 23: 259.

記載: 体長約7mm.

体は半円筒形。体の毛は黒色部では黒く, 橙色部では橙黄色。頭部は光沢のある黒色でやや青みがかり, 微細な点刻がやや密にある。頭盾と上唇は暗紅色。下唇と小あごひげ, 咽喉板は橙色, 触角は黒色, 鋸歯状で第4節以降は金色の軟微毛を密に装い, やや光沢を欠く。第3節は細く, 先端はあまり広がらない。

前胸背板は緑どられ, やや光沢のある濃い橙色で, 前縁に横長の黒色紋があり, 細かい点刻を頭部より密に装う。小楯板は横長の台形。上翅はやや光沢のある黒色で, 前胸背板よりも密でやや粗く点刻される。点刻は部分的に合着する。一対の縦隆条は基部で最も強く, 徐々に弱くなり, 中央を過ぎたところで消失する。また会合線に沿って一対の弱い縦隆条もあるが, 全翅長1/3ほどで消失する。

腹部は橙色であるが, 第4腹板の後半部と第5, 6腹板は黒色となる。腿節と跗節下面は橙色, 腿節の先端部と脛節, 跗節上面は黒色。爪は暗紅色。

検視標本: 1♀, 沖縄県石垣市平久保, 27. V. 1994, 石井正雄採集。

分布: 日本 (石垣島), 台湾。

備考: 採集した石井氏の話では, ビーチングで得たということであるが, 詳しい採集状況は不明とのこと。

最後に貴重な標本をいただいた石井正雄氏に深く

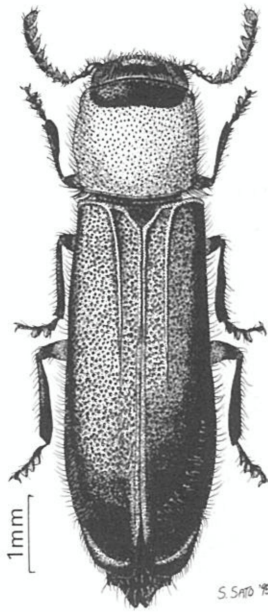


図1. ホタルツツカッコウムシ
Tenerus formosanus SCHENKLING, ♀; 沖縄県石垣島産。

* Shinya SATO, One Checkered-Beetle New to Fauna of Japan.

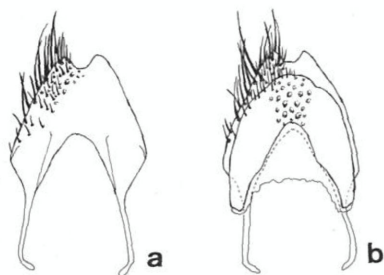


図2. *T. formosanus*, ♀腹部末端節: a, 背面; b, 腹面。

お礼申し上げる。

○ウバタマコメツキ類の大顎の微小突起

コメツキ類の大顎の基部上面には、大部分の種に微小突起群がみられ、上唇の裏側の基部両側にもそれに対応する構造が存在することは、大平(1993)が報告したとおりである。

大顎の微小突起の形態は、属間や亜科間で類似性がみられる。ウバタマコメツキ属の微小突起群は、きわめてよく発達しているだけでなく、微小突起群に混ざって針状の剛毛が散在している(図1, A, C)。フタモンウバタマコメツキ(*Cryptalaus larvatus pini*)では、微小突起群は図1, Bに示したように、卵形状に集合した突起群が密に分布し、針状の剛毛を不規則に分布している。ウバタマコメツキ(*Cry-*

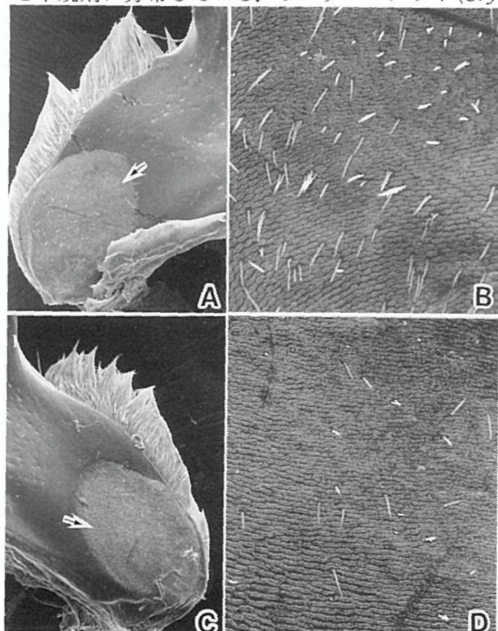


図1. 大顎の基部上面の微小突起群(↑印)

A, B (Aを拡大)はフタモンウバタマコメツキ(豊橋産); C, D (Cを拡大)はウバタマコメツキ(対馬産)。

参考文献

- GORHAM, H. S., 1877. Description of new species of Cleridae. *Trans. Ent. Soc. Lond.*, 1877: 404.
 SCHENKING, S., 1912. H. SAUTER'S Formosa = Ausbeute. Cleridae (Col.). *Ent. Mitt.*, 1(11): 329.
 CAPIN, E. A., 1924. A classification of the the philippine components of the coleopterous family Cleridae. *Phil. Journ. Sci.*, 25: 259-271.
 三輪勇四郎, 1931. 台湾産甲虫目録. 台湾總督府中央研究所農業部報告, 55: 111-116.
 CORPORAAL, J. B., 1950. Cleridae. *Coleopterorum Catalogus Supplementa*, pars 23, Uitgeverij Dr. W. Junk, 's-Gravenhage, 257-265.

(大阪府豊中市)

ptalaus berus)では、微小突起群は図1, Dに示したように、突起群は帯状に横に連なって生じており、針状の剛毛はフタモンより少ない。

このように、微小突起群に混ざって異質の剛毛を生ずるものは、筆者が検した本科の他の種にはなく、本属特有のものと考えられる。今後、その機能などについても調べていきたいと考えている。

大平仁夫, 1993. コメツキムシ類の大顎と上唇にある微小突起群の構造について. *Elytra, Tokyo*, 21(1): 51-54.

(愛知県岡崎市, 大平仁夫)

○東京都におけるアオドウガネの採集例

アオドウガネ *Anomala albopilosa* HOPE は西日本に分布の中心があり東日本では採集例が少ない種のようなのである。関東地方からの最近の報告としては榎戸により横浜市からの死骸の記録がある。また田尾・岸は茅ヶ崎市より過去の記録も含めて報告している。筆者は下記のように大田区および品川区において本種を多数採集したので報告する。

大田区の大井埠頭で1992年に初めて採集したがその後追加できず、昨年(1994年)2頭を追加することができた。本年はその定着を確認するために調査を試みたところ20頭近く採集することができた。特に品川区では埋立地にできた公園のアジサイを食害しており、数本の木がほとんど食いつくされている状態であった。おそらく本種は東京湾づたいに分布を広げつつあるように思われる。

1頭, 東京都大田区大井埠頭, 20. IX. 1992, 筆者採集; 1頭, 東京都大田区大井埠頭, 12. IX. 1994, 筆者採集; 1頭, 東京都大田区城南島, 12. IX. 1994, 筆者採集; 2頭, 東京都大田区大井埠頭, 1. IX. 1995, 筆者採集; 17頭, 東京都品川区みなとヶ丘ふ頭公園, 1. IX. 1995, 筆者採集。

参考文献

- 田尾美野留・岸 一弘, 1993. 茅ヶ崎市の甲虫. 神奈川虫報, (104): 13-68.
 榎戸良裕, 1995. 横浜市の北部でアオドウガネを拾う. 神奈川虫報, (110): 43.

(東京都大田区, 和泉敦夫)

Pidonia 属シラネヒメハナカミキリ種群の覚え書 (2)

ハクサンヒメハナカミキリの地理的変異

窪 木 幹 夫

ハクサンヒメハナカミキリ *Pidonia hakusana* は加賀白山を模式産地として、北アルプスの白馬岳や針ノ木谷の標本を用いて記載された (OHBAYASHI & HAYASHI, 1960). HAYASHI (1968) は本種を日光山塊に生息するシラネヒメハナ *P. obscurior* PIC の亜種とし、これとは別に、八ヶ岳本沢温泉を模式産地としてヨコヤマヒメハナ *P. yokoyamai* を記載した。現在、ヨコヤマヒメハナはシラネヒメハナの一型と考えられている。

本報告では体色や上翅斑紋に地理的変異の甚だしいハクサンヒメハナの各個体群の形態、色彩を調べ、地理的・垂直的な分布様式を参考にグルーピングを試み、各地域個体群の分布の形成について考えた。

本文に先立ち、貴重な標本や情報を下さった平山洋人、伊藤尚武、中林博之、坂上正弘、武智昭一、筒井 謙、露木繁雄の各氏に厚くお礼申し上げる。

地理的分布

ハクサンヒメハナは本州中部の日本海側を中心に分布する。その分布域は日本海側の連続的な分布域とその南側の不連続的な分布域に分けられる。日本海側の分布域は、越後山脈～尾瀬・武尊山～三国山脈～浅間山、戸隠山塊～妙高山～雨飾山、白骨スーパー林道以北の北アルプス、白山山塊に広がっている。一部森林の伐採や火山活動による草原化や荒原化した地域を除き、ハクサンヒメハナはこれらの山系に連続的に分布する。一方、この南側には地理的に限定されて孤立分布する小個体群が点在する。現在、中央アルプスの経ヶ岳横川峡、美ヶ原～武石峠、八ヶ岳の本沢温泉、南アルプスから知られている。

垂直分布

長野県内のハクサンヒメハナの垂直分布は、早川

(1981) によってまとめられている。中部地方では、低所に近縁のホソガタヒメハナ *P. semiobscura* が、より高所にハクサンヒメハナが生息する。北アルプスでは、標高 1,400～1,800 m を境に上部にハクサンヒメハナ、下部にホソガタヒメハナが生息する。この分布境界は一見ブナ林や針葉樹林といった森林植生に一致するように見える。確かに、上高地のブナ帯にはホソガタヒメハナが、針葉樹林帯にはハクサンヒメハナが確認された。しかし、各地で両種の垂直分布を調べると、ホソガタヒメハナがない北アルプス北部では、ハクサンヒメハナがより低所に生息域を広げていた。ハクサンヒメハナが分布しない北アルプス南部では、ホソガタヒメハナがより高所に生息域を広げ、亜高山性の針葉樹林帯にまで生活していた。ホソガタヒメハナの記録が少ない戸隠・妙高山塊や三国山系の日本海側でも、ハクサンヒメハナはブナ帯から亜高山性の針葉樹林帯に生息していた。亜高山帯に針葉樹林を欠く上越山塊では、7月中旬から8月上旬に山頂や稜線近くでハクサンヒメハナを見かける。より早い季節、たとえば、蓬峠の新潟県側での6月中旬の調査では標高 750 m 付近、清水峠の群馬県側での6月下旬の調査では標高 850 m 付近のブナ林のタニウツギ、ミズキ、ナナカマドにハクサンヒメハナが訪花していた。このように、日本海側のハクサンヒメハナは基本的にブナ林に、一部の地域で亜高山帯の針葉樹林に生息している。

一方、孤立分布する小個体群は、本沢温泉のように垂直分布が高く、亜高山帯の針葉樹林に生息する個体群もあれば、横川峡のように垂直分布が比較的低く、おもにブナ帯に生息する個体群もある。

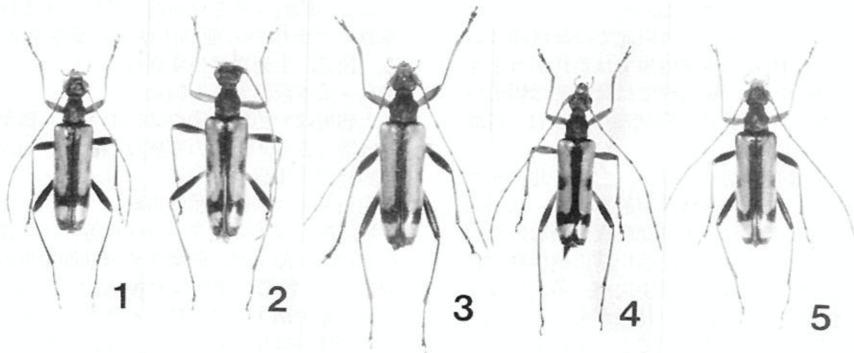


図1～5. ハクサンヒメハナカミキリ *Pidonia obscurior hakusana* OHBAYASHI et HAYASHI ♂. 1: 長野県大町市扇沢産, 2: 長野県辰野町横川峡産, 3: 長野県南牧村本沢温泉産, 4: 新潟県湯沢町三国峠産, 5: 群馬県片品村至仏山産。

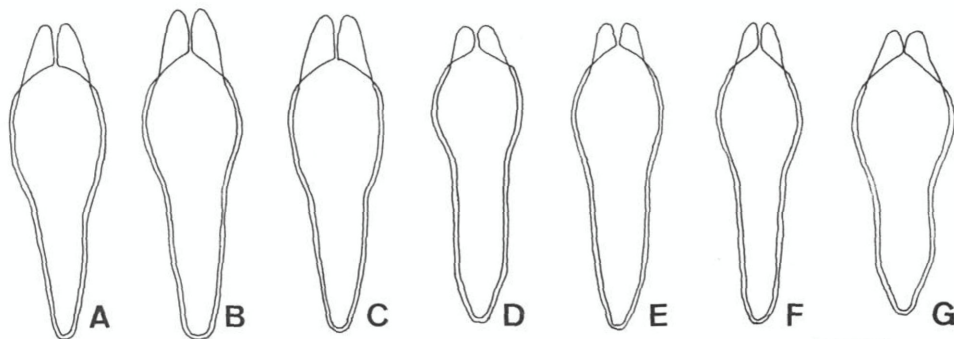


図6. ハクサンヒメハナカミキリ♂の交尾器の側葉片の地理的変異。A: 岐阜県白川村大倉山産, B: 長野県安曇村上高地産, C: 新潟県妙高高原町笹ヶ峰産, D: 長野県御代田町天狗の露地産, E: 群馬県片品村白根山産, F: 長野県南牧村本沢温泉産, G: 長野県長野町横川峡産。スケール: 0.3 mm。

色彩変異

ハクサンヒメハナの頭部、前胸部、小楯板の色彩の変異の傾向をその地域の75%以上の個体に共通する特徴をもとに記述した。さらに、90%以上の個体にみられる場合は、変異は小さいと表現した。

白山、北アルプス、妙高・戸隠山塊のハクサンヒメハナは、頭部、前胸部、小楯板が黒色で、一部の個体の頭部の頬部、前胸前後縁、小楯板が弱く赤褐色になる傾向があった。妙高山塊東部や戸隠山塊では赤褐色個体やや多かった。浅間山から谷川岳の三国山脈西域では、齊藤(1988)も指摘するように、頭部、前胸部、小楯板が明るい赤褐色になったり(浅間山や平標山)、黒色になったりする(本白根山や谷川岳)。本白根山の針葉樹林帯では頭部、前胸部、小楯板の黒色が強いが、草津側のブナ帯では、弱く赤褐色の個体が多かった。谷川岳以北の上越山塊、尾瀬、武尊山、越後山脈の各個体群は、頭部、前胸部、小楯板が黒色で、変異は小さい。

小個体群では、本沢温泉の個体群は頭部、前胸部、小楯板が黒色で、変異は小さい。横川峡ではそれらは黒色から赤褐色で、変異が大きい。

比較形態

白山、北アルプス、妙高・戸隠山塊の各個体群は♂交尾器の側葉片先端の葉状部が長く、大きい(図6-A, B, C)。三国山脈とそれ以北では葉状部は短く、小さい(図6-D, E)。本沢温泉では葉状部は小さく、細長い(図6-F)。横川峡では葉状部は幅広いが、短い(図6-G)。側葉片の葉状部の形態は、各地域個体群ごとに特徴があった。

末端節背板の後縁の切れ込みは、白山、北アルプス、妙高・戸隠山塊の各個体群が最も深く、ハヶ岳もやや深い傾向があった。末端節腹板の側縁角や後縁の突出と中央の切れ込みは、横川峡の個体群では側縁角が発達せず、後縁の先端中央が三角形に浅く切れ込み、他地域に見られない特徴があった。

前胸基部の幅と長さを比較すると、至仏山や日光白根山の個体群に次いでハヶ岳の個体群が短かった。前胸基部の幅と中央突出部の幅を比較すると、ハヶ岳と浅間山～三国峠の各個体群で、基部幅<中

央突出部幅の関係があった。他の個体群では、個体変異が大きかった。前胸の前後縁部を除く側部の形態は個体変異はあるが、白山、北アルプス、妙高・戸隠山塊の各個体群では三角形に突出した個体が多かった。横川峡では丸みを帯びてふくらみ、ハヶ岳では三角形に強くふくられる傾向があった。浅間山～三国峠では側部全体が三角形にふくれ、至仏山と尾瀬では側部中央部が三角形に突出していた。

ハクサンヒメハナのグループ分け

各個体群の形態や色彩の変異と地理的分布や垂直分布などの分布様式を総合的に判断して、ハクサンヒメハナのグループ分けを試みた。

①白山、北アルプス、妙高・戸隠山塊

♂交尾器の側葉片の形態が②～⑤とは異なる。色彩の変異は比較的小さい。中部山岳地域の日本海側のブナ帯から亜高山性の針葉樹林帯に生息する。

②三国山脈西域(浅間山～苗場山・平標山)

側葉片と末端節背板の形態で①、④、⑤と区別できる。色彩の変異が甚だしい。この変異は単純な地理的クラインではなく、山ごとに変化する。ブナ帯から亜高山性の針葉樹林帯に生息する。針葉樹林の発達の悪い明環境下では色彩が赤褐色化する。

③谷川岳～尾瀬・武尊山～越後山脈

②と形態的な差を見いだせない。①と同様に日本海側のブナ帯から亜高山性の針葉樹林帯に生息する。色彩、上翅斑紋の変異は小さい。

④ハヶ岳本沢温泉、天狗岳

上翅斑紋や色彩は②や③に似るが、側葉片の形態で区別できる。色彩の変異は小さい。亜高山性の針葉樹林帯に生息する。

⑤中央アルプス経ヶ岳横川峡

地理的には①の北アルプスに近く、上翅斑紋や色彩では②に似るが、側葉片や末端節腹板の形態で区別できる。色彩の変異は大きい。ブナ帯に生息する。

美ヶ原や南アルプスにもハクサンヒメハナと思われる個体が採集されている。④、⑤を含め、これらの小個体群はシラネヒメハナカミキリ種群の分化を考える上で、重要な資料になるであろう。

分布の形成

窪木(1985)は、シラネヒメハナの *obscurior* と *hakusana* とウルム氷期の最寒冷期には異なる地域(太平洋側と日本海側)に生息していたが、後氷期の温暖化による森林の北への移動と垂直分布域の上昇で移動し、帝釈山脈付近で両個体群が出会い、一部の地域で遺伝子が交流し、中間的な個体が出現したという仮説をたてた。なお、この *hakusana* はここで言う①や③を指す。この考えに立って、ハクサンヒメハナの分布の形成について考えてみたい。

ウルム氷期の最寒冷期には、中部山岳地域でも雪線の低下により、植生が1,000 m以上も低下し、森林帯の上限も1,400~1,500 m付近にあった。幼成虫とも森林環境にその生活を依存する *Pidonia* の生息域も現在より低かったと考えられる。ハクサンヒメハナも周氷河的環境となった中部山岳地域を避けて、より南方もしくは西方の太平洋側と日本海側に分かれて生息していた。太平洋側では、後氷期の温暖化に伴い、分布好適地が変動し、分布域が限定され、狭い地域に閉じ込められた。近縁種のホソガタヒメハナとの競争で、ハクサンヒメハナの分布域が亜高山帯へ押し上げられた可能性が高い。一方、日本海側では後氷期のブナ林の北進と上昇により、ハクサンヒメハナも中部山岳地域に分布域を拡大した。さらに、幼虫を冬の低温や乾燥から守る多雪気候の出現が、日本海地域の *Pidonia* の生活に有利に働いたと推定される。このように、ハクサンヒメハナの分布域の拡大は亜高山帯の針葉樹林によるのではなく、その生息基盤であるブナ林の形成、拡大と深い関わりがあると推定される。ちなみに、長野県野尻湖(標高654 m)でブナ属の花粉が急増するのは、12,000年から10,000年前にかけてである(TSUKADA, 1982)、また、東北日本を中心とする日本海側各地で、雪圧の下でも葡萄型をとれるカバノキ属の花粉が高い出現率を示すのは、13,000年前からである(SAKAGUCHI, 1978)。

生物の系統発生には、発生・変異・繁栄・滅亡という段階性がみられ、これに対応して分布圏も発展的固有から広域連続分布(繁栄に対応)そして不連続分布から依存的固有という歴史的過程をたどる(日浦, 1961)。日本海側の①と③のハクサンヒメハナはブナ林の拡大を基盤にして発展段階にあると考えられる。一方、④と⑤の不連続な孤立分布は、これらの小個体群が縮小、衰退段階にあると推定され

る。問題は色彩や上翅斑紋に大きな変異を持つ②の三国山脈西城の個体群である。浅間山の針葉樹林帯での7月下旬の調査では、この頭部、前胸部の赤褐色のハクサンヒメハナが最優占種であった。②は日本海側に分布する①や③と同様に日本海側からブナ林とともに分布域を拡大したのか、それとも、④や⑤の小個体群の一部が三国山脈西城で適応的に分化したのか、詳しく調べる必要がある。

ハクサンヒメハナの地理的分布、垂直分布や色彩変異、形態を解析し、その分布の形成をウルム氷期以後の環境の変化を参考に考えた。①の北アルプスと⑤の経ヶ岳の個体群の形態の差は明瞭であった。⑤の小個体群は環境適応能力が小さくなって断片的な分布域に追い込まれたとするなら、この過程では適応的な形態の変化は起こりにくいと考えられる。①の北アルプスと⑤の経ヶ岳にみられる形態の差は、現在のような分布状況になったと推定されるウルム氷期以前に、できあがっていたのかもしれない。

参考文献

- 早川広文, 1981. ヒメハナカミキリ属の生態. 清沢清親他編: 図説長野県のカミキリムシ, p. 39-57, 日本民俗資料館, 松本.
- HAYASHI, M., 1968. A monographic study of the lepturine genus *Pidonia* MULSANT (1863) with special reference to the ecological distribution and phylogenetical relation (Coleoptera: Cerambycidae) (Part 2). *Bull. Osaka Jonan Women's Jr. Coll.*, 3: 1-61.
- 日浦 勇, 1961. 日本産チョウ類分布研究の方法について (2). 昆虫学評論, 12: 64-70.
- 窪木幹夫, 1985. 分化型生物からみた東北(2) ヒメハナカミキリ. 東北の自然, (2): 14-19.
- OHYAYASHI, K. & M. HAYASHI, 1960. Study of *Pidonia*-group (Coleoptera: Cerambycidae) II. *Ent. Rev. Japan*, 11: 13-16.
- 斉藤秀生, 1988. 山々で分化したシラネヒメハナカミキリとその地域変異. 佐藤正孝編: 日本の甲虫, 東海大学出版会, p. 125-132.
- SAKAGUCHI, Y., 1978. Climatic changes in central Japan since 38,400 yBP. *Bull. Dep. Geogr. Univ. Tokyo*, 10: 1-10.
- TSUKADA, M., 1982. Late-Quaternary development of the *Fagus* forest in the Japanese Archipelago. *Jap. J. Ecol.*, 32: 113-118.

(東京都世田谷区)

○アオヘリアトキリゴミムシを東京都町田市で採集
アトキリゴミムシ類の中でもアオヘリアトキリゴミムシ *Parena latecincta* (BATES) は採集例の少ない種と思われるが、東京都で本種を採集したので報告する。

1 頭, 東京都町田市小野路, 16. VII. 1995.

採集地は丘陵地の頂上部分に残された小さな雑木林で、道路に面した低いクスギの葉の先端部をピーティングして採集した。

ちなみに関東地方における本種の採集記録を調べてみたところ、神奈川県から2例(1981)、埼玉県から1例(1978)、群馬県から3例(1985)報告されているが、東京都からの採集記録は見出せなかった。

(東京都世田谷区, 沢田和宏)

○西表島からのジュウエグリゴミムシの記録

エグリゴミムシ属 (*Eustra*) は、ヒゲトオサムシ科 (Paussidae) に含まれ、日本から3種が報告されている。筆者は最近、*Eustra* 属の甲虫を沖縄本島と

西表島で採集した。これらを検討したところ、いずれも奄美大島から記載され、徳之島、沖縄本島からも報告のあるジュウジエグリゴミムシ *Eustra crucifera* S. UÉNO であることが確認された。今回の報告は西表島からの初記録となる。

6♂♂5♀♀, 沖縄県竹富町西表島マリユード滝付近, 4. III. 1995, 筆者採集・保管。

西表島の個体は沖縄本島産の個体や原記載等と比較したところ、頭部が顕著に暗色を呈さないことや上翅に見られる毛の若干多いこと、また、上翅暗色紋は原記載の図や原色日本甲虫図鑑の写真に見られるような四つの黒斑が個々に独立して出現する個体から各斑紋が融合する個体(図1参照)までの色彩変異が認められた。

このたび得られた個体は沖縄本島および西表島の両島いずれの場合もアリが営巣している赤朽れの朽木中で、しかも林縁部の日光が直射するような場所に限って採集することができた。また、西表島での観察では ANDREWS (1929) が指摘したように本種が一ヶ所に一つの小集団で活動していたが、沖縄本島では単独で活動中の個体を採集した。この属の種が真に好蟻性、もしくは好白蟻性であるかどうかは本属の生態的知見に関する議論が少ない現状では結論し難い。一方、本属の種に関して UÉNO (1981) は *Eustra* の好白蟻性であるとの断定をせずにとどめている。また、本属では Paussidae において一般によく知られるような触角節の融合およびこの融合した節の内部の分泌線 (Wasmann's myrmecophile glands) の存在に起因する著しく変形、特殊化した触角形態は知られておらず、アリやシロアリとのコミュニケーションの可能性を追求するのは困難である。本属の種の生態的観察は、採集の機会が少なく、目につきにくい等の理由からも難しいかと思われるが、今回観察された本種の集合傾向やアリとの関係等を念頭においた詳細な観察が今後望まれる。



図1. ジュウジエグリゴミムシ *Eustra crucifera* S. UÉNO. 西表島産雄個体。

参考文献

- ANDREWS, H. E., 1929. Coleoptera. Carabidae. Carabinae. *Fauna of British India, including Ceylon and Burma*, xviii + 431 pp. 1 map, 9 pls. Taylor & Francis, London.
- KISTNER, D. H., 1982. The social insects' bestiary. In HERMAN, H. R. (ed.), *Social Insects*, 3, 2-243. Academic Press, New York.
- 中根猛彦, 1973. 日本の甲虫, (3), ひげぶとおさむし科・おさむし科. 昆虫と自然, 8(11): 2-3.
- UÉNO, S.-I., 1964. Notes on carabid beetles from Amami group of the Ryukyu Islands. *Kontyû, Tokyo*, 32: 249-263.
- , 1981. A new blind species of the genus *Eustra* (Coleoptera, Paussidae) from northern Thailand. *Kontyû, Tokyo*, 49: 620-623.
- 上野俊一, 1985. ヒゲブトオサムシ科. 上野俊一, 黒沢良彦, 佐藤正孝編著, 原色日本甲虫図鑑 (II), pp. 4-5, 1 pls. 保育社, 大阪.

(東京農業大学, 佐藤陽路樹)

○福島県におけるマルテントウダマシ科の記録

マルテントウダマシ科 Mychothenidae は、テントウムシダマシ科 Endomychidae の1亜科であったが、佐々治 (1987) により独立の科に昇格された。しかし科群名としては、Anamorphidae が優先するので、その名称を用いねばならない。また日本から知られている全ての種が1~2 mm と微小なためか、報告されることはあまりないようである。

筆者は、福島県より若干の本科甲虫を得ているので報告する。

1. ヒメマルガタテントウダマシ *Dexialia minor* (CHŪJŌ)

1頭, 福島県原町市横川・乞食石林道, 23. V. 1992, 久保田憲二採集。

2. ムナグロマルテントウダマシ *Dexialia mirabilis* SASAJI

本種は、筆者の採集した個体をもとに、SASAJI (1995) により記載されたばかりのものである。基準産地は福島市飯坂町茂庭林道であるが、記載文では Motei-rindo, Iizaka-cho, Fukushima City となっている。Moniwa-rindo, Iizaka-machi, Fukushima City が正確な表示となる。筆者が標本を送付する際に、ふりがなを付けなかったために生じた誤りである。

なお、本個体はブナ林中の広葉樹の朽木のピーティングにより得た。

3. マルガタテントウダマシ *Bystodes orbicularis* (GORHAM)

1頭, 福島県東白川郡棚倉町八溝山, 3. VII. 1994, 久保田憲二採集。

1頭, 福島県双葉郡楡葉町井出川林道, 30. VII. 1988, 久保田憲二採集。

なお、標本の同定ならびに文献を恵与下さり、科群名についてご教示いただいた、福井大学の佐々治

寛之博士に厚くお礼申し上げる。

引用文献

佐々治寛之, 1987. テントウムシダマシ科とその周辺の種類体系. 福井虫報, (1): 44-51.

SASAJI, H., 1995. Contribution to the taxonomy of the superfamily Cucujoidea (Coleoptera) of Japan and her adjacent districts, VIII. Mem. Fac. Educ., Fukui Univ., Ser. II, (47), Part 2, 21-30.

(福島県郡山市, 久保田憲二)

○福島県金山町におけるルイスホソカタムシの記録と若干の生態的観察

ルイスホソカタムシ *Gempylodes lewisii* SHARP は全国的に稀な種といわれ、福島県においても記録は非常に少ない。筆者は福島県金山町で本種を複数採集するとともに若干の生態的観察を行ったので報告する。

5頭, 福島県大沼郡金山町吸沢源頭部 (標高700m), 2.VII.1995, 筆者採集, 標本保管。

採集地点は只見川本流右岸に沿って東西に伸びる標高900m前後の山地の北斜面に残されたブナの原生林で、南斜面の只見町布沢から「烏帽子林道」が開削され、伐採が進行しつつある。採集した個体は全て、土場跡に孤立した1本のブナ衰弱木の樹幹から採集された。この木(写真)は胸高直径約85cm, 樹高約25mあり、枝先には疎らに葉をつけていたが、根元付近の樹皮は剥離し始めていた。本種は剥離前の樹皮上を歩いており、動作は緩慢だった。幹の円周方向に歩く場合は前胸背と上翅の間で体を折り曲げて幹の面に密着させ、遠目には *Xantholinus* 属のハネカクシのように見えた。採集した個体のうち1頭は樹皮表面に垂直に掘られた円形の穴に体長の半分程度を挿入しており、他に尾端をわずかに外部に出した状態のため採集できなかった1個体がいた。これらの穴の直径は本種の体のそれとほとんど同じで、慎重に引き出さなければ破損の恐れがあった。これらの穴が本種によって掘られたものか否かは確認できなかった。採集日は雨上がり



ルイスホソカタムシの米集木

の曇天で気温は25℃程度だったが、好天であればこの米集木は直射日光に曝されていたと思われる。

なお、以上の観察は福島虫の会の調査会の折に行なわれたものであり、調査の成果は同会誌に発表される予定である。

(新潟県南魚沼郡, 芳賀 馨)

○北海道におけるキアシツヤヒラタゴミムシの記録

Synuchus callitheres (BATES) キアシツヤヒラタゴミムシは北海道では個体数が少なく、安田・松本(1993), 木元・安田(1995)の著したリストの中には網走支庁管内、十勝支庁管内からの記録はない。筆者は下記のごとく本種を採集しているので分布記録として報告する。

1♂, 常呂郡端野町川向(常呂川河畔林), 8.IX.1989; 1♂, 常呂郡端野町忠志(常呂川側溝), 10.IX.1993; 1♀, 河西郡芽室町国見(然別川河川敷), 7.IX.1995.

末筆ながら同定の労をとられた松本英明氏に深謝する。

(北海道北見市, 加藤敏行)

○アマミマルカッコウムシ沖繩本島に産す

アマミマルカッコウムシ *Allochotes yuwanensis* YAJIMA et NAKANE は、原色日本甲虫図鑑(III)によればその分布として、琉球(奄美大島)となっているが、のちに中村(1986, 月刊むし, (188))は、屋久島から報告している。筆者は、これまでに記録のない沖繩本島で本種を採集しているので報告する。

2頭, 沖繩県名護市羽地大川, 21-29.VI.1986, 田中 稔採集。

2頭ともススキのピーティングで採集した。1頭は毛が上翅側縁部にまばらに生え、他の1頭は上翅全面に密生している。

参考文献

黒澤良彦, 1985. 原色日本甲虫図鑑(III).
中村俊彦, 1986. 月刊むし, (188).



写真A. 沖繩本島産アマミマルカッコウムシ, 毛のまばらな個体; 写真B. 沖繩本島産アマミマルカッコウムシ, 全面に毛が密生した個体。

(兵庫県西宮市, 田中 稔)

○イトヒゲニセマキムシの福島県からの記録

イトヒゲニセマキムシは、本州では現在までに神奈川県¹⁾、静岡県⁸⁾、岐阜県^{2,5,6)}、三重県^{2,5,6)}、石川県⁴⁾、福井県⁷⁾、兵庫県⁹⁾などで記録されている。

今回筆者は、福島県で本種を得ることができたので報告する。いずれも、広葉樹の朽木をピーティングして得た。なお今回の記録は、現在までのところの北限と思われる。

1 頭、福島県いわき市小川町夏井川溪谷, 23. IV. 1995, 久保田憲二採集。

1 頭、福島県いわき市小川町木戸川溪谷, 7. V. 1995, 久保田憲二採集。

引用文献

- 1) 平野幸彦, 1978. イトヒゲニセマキムシ丹沢に産す. 甲虫ニュース, (43): 4.
- 2) 市橋 甫ら, 1985. 三重県の記録の少ない甲虫類. ひらくら, 29 (3): 35-48.
- 3) NAKANE, T., 1963. New or little-known Coleoptera from Japan and its adjacent regions. XVII. *Fragmenta Coleopt.*, pars 5: 21-22.
- 4) 中田勝之, 1994. イトヒゲニセマキムシ石川県に産す. 月刊むし, (286): 13-14.
- 5) 生川展行, 1986. 三重県内で得た興味深い甲虫 (I). ひらくら, 30 (3): 70-73.
- 6) 生川展行, 1990. 三重県北部で得た興味深い甲虫. ひらくら, 34 (4): 64-65.
- 7) 佐々治寛之ら, 1985. 福井県昆虫目録. 甲虫目 Coleoptera, 79-245.
- 8) 多比良嘉晃, 1983. イトヒゲニセマキムシの採集例. 静岡の甲虫, 2 (1): 17-18.
- 9) 高井 泰, 1988. イトヒゲニセマキムシの岐阜県からの記録. 甲虫ニュース, (83/84): 7.

(福島県郡山市, 久保田憲二)

◇採集会報告◇

1995年度の採集例会は、昨年に引き続き「松本むしの会」と共催で、6月17日~18日に長野県山之内町志賀高原一ノ瀬のチウーホテルを宿舎にして行われました。幸い好天に恵まれ、残雪の多い裏志賀や雑魚川林道の周辺はなかなかの好採集地との印象を深めました。さすがに有名リゾート地だけあって宿舎も食事にも良く、参加者一同、採集と懇談を愉



しむことができました。御世話になった「松本むしの会」の皆さんに御礼申し上げます。参加者22名。

ただし今回は、担当幹事と事務代行幹事が共に不参加で、通知と案内の着到が遅くなり、当日まで宿舎に参加者数の連絡がない有様で、宿舎の手配に尽力された平沢伴明氏にご迷惑をかけました。採集会は本学会の恒例行事として永年続けられてきたものです。次回はこのような不手際のないことを願います。(笠原 記)

◇例会報告◇

1995年第3回例会を9月30日(土)、午後1時30分より、東京農業大学農学科会議室で開催しました。

講演は武田雅志氏による「カミキリムシ科の幼生期について」。参加者は26名。講演要旨は下記のとおりです。(例会担当, 日下部良康)

講演要旨

カミキリムシ類の幼虫は、形態的には一部の例外を除き、乳白色の細長い円筒形で、表面に目立った刺毛や突起がほとんどないことが特徴である。また生態的には、食材性で多くは樹木の枯れた幹、枝や樹皮、一部の種では生きた樹木の幹や枝、あるいは草本の茎や根などを寄主とする。樹木の枯死部のうち、辺材部から芯材部を寄主とするものとしてヘリウスハナ、イシガキフト、樹皮や樹皮下を寄主とするものとしてヘリグロアオ、シラホシヒゲナガコバネ、根を寄主とするものとしてノコギリ、生木の樹皮を寄主とするものとしてエゾトラ、生木の樹洞を寄主とするものとしてヒラヤマコバネ、生木の幹を寄主とするものとしてアオ、生木の細い枝を寄主とするものとしてリュウキュウヒメ、生きた草本の茎や根を寄主とするものとしてカタモンビロウドなどの生態について、スライドを多く使い、解説した。(武田雅志)

日本鞘翅学会

会費(一カ年)6,000円、次号は1996年3月下旬発行予定

発行人 佐藤正孝

発行所 日本鞘翅学会 東京都新宿区百人町 3-23-1 国立科学博物館昆虫第1研究室

電話(3364)2311, 振替 00180-3-401793

印刷所 (株)国際文献印刷社

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00,0,1,2,3,4,5,6号,有頭ダブル針も出来ました。その他,採集,製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

振替 00130-4-21129

電話 (03) 3409-6401 (ムシは一番)

F A X (03) 3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社